弔辞

渡辺澄夫先生、先生の突然の御逝去の報を聞いて一瞬耳を疑いました。そしてこの厳しい「無情迅速」という終末に心が動きました。ここに厳しい現実を前にして謹んで先生の御冥福をお祈りし、お別れの言葉を申し上げます。

思えば太平洋戦争に敗北した暗い昭和二十三年の夏、戸次町般若寺弥生時代遺跡に食糧を一杯詰め込んだリュックサックを背負って先生がお出になった。その日が先生との最初の出会いでした。

その後、先生はくり返し私を激励してくれました。その時の御言葉を古いノートから書き写してきましたので、ここで讀ませていいただきます。

「私は一枚一枚の記録を大切に勉強して文献史学の道を歩んでいます。それは貴殿のクワの下から出てくる遺物と同じです。ただ記録とは不思議なもので、讀んでいるとそれを書き残した人の考え、行動がみえてくることがあります。そしてその頃の社会が反映されてまいります。私はそれを楽しみにより厳しく記録に挑戦しています。私にはよくわかりませんが、貴殿の手に握られた弥生式土器の一つ一つが一枚の記録と同じでそれを作った人のぬくもりを感ずるのだろうと思います。記録と土器は同じだネ。これから手をとり合って頑張ろう。」と言われました。

戦後は世界的にみて歴史観が混乱した時代でした。考古学はその時代を担うものとして認識され、発展を重ねてきました。だが近頃考古学に大きな疑問を抱くことがしばしばあります。やたらに新しい発見があり、それが何でも分かってしまう考古学です。このことについて、新しい考古学理論を開いたアメリカのルイス・ビンフォードは「考古学的事実は何も語ってくれない。だが文献史料を扱う歴史学者は記録を通して人間の思想に直接接近できる」と言っています。それは渡辺先生が戦後、戸次の遺跡で私に語りかけたお言葉と全く同じでした。

さて、先生は畿内荘園の研究、豊後国荘園史料をはじめ、数多くの業績を残されました。大分県文化財保護審議会々長とし

て、文化財行政の問に答え適切な指導をされました。また大分県地方史学会を創設し、長く地方史学の充実をはかり、かくれた史料の発掘、顕彰に努めました。更に大分大学・別府大学に勤務し歴史学研究の方法論とその実践の道を教授し、一枚一枚の記録を研究し、それを重ねてゆくことが如何に大切な仕事であるかを教えました。残された私達は、先生の教えを顕彰し継続したいと思います。

先生、ここでお別れの時が参りました。先生はこれから黄泉の国への旅立ちでありますが、そこは素晴らしい華蔵の世界だと聞いてます。御仏の教えでは、太陽の沈む西に浄土があります。一足先に旅立たれた奥様と共に、西方の彼岸にむかってお歩き下さい。

ここに万感の悲しみをこめてお別れいたします。先生、さようなら。

平成九年一月十八日

友人代表　賀川　光夫

◇

十六日の朝九時ごろ、豊田先生から渡辺先生のご訃報を耳にした時あまりにも突然のことで驚き、一瞬頭の中が真っ白になりました。　先生は昭和五十年に大分大学を退官されましたが、私は同じ年に卒業した者です。大分大学最後の弟子ということになります。学生時代考古学に熱中し、国史研究室へほとんど顔を出さない不肖の弟子でした。しかし先生の講義はとても興味深く、必ず拝聴していました。先生が著名な中世荘園の研究者であることは、学生たちの間でつとに有名でした。そういう意味では近寄りがたい存在であったのかも知れません。先生は親しみのある玖珠弁で、身振り手振りを交えながら情熱を傾け、荘園制や古文書学の講義をされ、学問に対する真摯な姿勢は学生たちに深い感銘を与えました。

何より忘れられないのは、先生の退官記念講演でした。先生が荘園制を研究されるようになったきっかけやその研究の面白さ、科学的歴史学の重要性、津久見から大分までの通勤途中一週間たらずで年号を暗記されたこと、意外にも学生時代に考古学の道に進みたいと思われたこと、さらに退官後は中世史の研究者を育てたいという思いなどを熱っぽく語られました。私はいつしか先生のお話に魅了され、先生と同じ道を歩むのではないかと感じました。それ以来、まがりなりにも中世史研究の道に進み、年号なども覚えるよう努力してきました。

大学を卒業してから、二十年以上も先生の謦咳に接してきました。大分県中世文書研究会などで、先生から懇切丁寧な古文書の解読と、中世史研究の手ほどきを受けました。また、先生とは国東半島荘園村落調査など、さまざまな調査でご一緒させていただき、言葉では言い尽くせないほどの学恩を賜りました。

私の最大の楽しみは、月に一度中世文書研究会に出席し、元気な先生にお会いすることでした。今年こそは本格的に中世史の勉強をしようと決意し、先生のご指導をと願っていた矢先のご訃報、もう先生にお会いできないと思うと、心の中に大きな空洞ができ心さびしい思いでいっぱいです。私にとって、かえすがえす残念なのは、先生のご期待に十分こたえることができなかったことです。

先生が八十四年のご生涯を一貫して私ども後学の者のために尽くされたお志を忘れることなく、みなそれぞれに拙き才分を磨き、先生の弟子としての名を辱めないことを誓います。先生、どうぞ私どもの命の限り、いつまでも私どものなかに生きつづけてください。私どもは先生のやさしい笑顔と学問追及の厳しい姿勢を忘れず、努力してまいりたいと思います。

弟子一同を代表して、謹んで哀悼の意を表します。

平成九年一月十八日

乙咩　政巳